

# 障害児の母親のアイデンティティ形成過程

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻  
2013M30004 谷川 郁代

## 【論文要旨】

発達に障害をもった子どもの療育は、近年サービス提供の場を施設から地域へと移し、家族と共に生活することが一般的となってきた。そのため、当事者である子どもだけでなく、その親や家族への支援の重要性がこれまでも増して言われている。障害児を育てる親がわが子が障害をもっているという事実を受け入れて、子どもに合った育児を身につけることは親子双方にとって必要なことであり、その過程を支援していくことは療育に携わる者にとって不可欠な役割のひとつである。考える。

子ども一人ひとりに合った適切な子育てが行えることは、健常な子どもにおいても容易なことではない。ましてや障害のある子どもの子育ての場合には、障害の特性や子どもの発達の状態に応じた行動が求められることとなり、さらに困難なものになると言えよう。しかし、親としての役割を果たしながら、そのような難しい子育てに対して自分なりに取り組んでいる障害児の母親たちも数多く見受けられる。そこで筆者は、このような母親たちが、どのようにして障害児の母親としての意識や態度を身につけているのかということに対して疑問を感じた。そこで、障害をもった子どもの母親の子育てに伴う自我、すなわち母親アイデンティティがどのように形成されて行くのか、ということに焦点をあてて研究することとした。

アイデンティティ（自我同一性）とは、E.H.Eriksonによって提唱された概念であり、「自分が時間的に連続しているという自覚（連続性 continuity）と、自分は他の誰かではない自分自身であるという自覚（斉一性 sameness）とが自分にあり、他人からもそのように見られているという感覚に統合されたもの（Erikson, 1959）」であるが、本研究における母親アイデンティティとは、「自分はこの子の母親であるという明確な自己意識を持ち、母親としてなすべきことを理解し、子育てを自信をもって行うことができ、親である自分に対して心理的な満足感や充実感が得られているもの」であると定義して、障害をもった子どもの母親が自らが障害をもった子どもの母親であることを自覚した子育てができて、その子育てに対して肯定的な感情が得られるまでの過程を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。

第1章では、本研究の背景となる先行研究についてのまとめを行った。第1節では、従来の障害児の親を対象とした研究で多く見られる障害受容に関する研究について、第2節では障害児の母親のアイデンティティに関する研究について、第3節では母親アイデンティティに関する研究についての知見をまとめた。

第2章では、障害児デイケアセンターを利用している未就学児の母親に対して、子ど

もの出生から現在までの子育ての中での「わが子への思い」と、「母としての私」と「母ではない私」の変化について、半構造化面接を実施した。調査項目は、①出生から障害の告知まで（第1期）の「わが子への思い」と、その時期の「母としての私」と「母ではない私」の受けとめ、②障害の告知を受けた時（第2期）の「わが子への思い」と、その時の「母としての私」と「母ではない私」の受けとめ、③告知を受けてから現在まで（第3期）の「わが子への思い」と、告知以降の「母としての私」と「母ではない私」の受けとめについて自由に語ってもらい、得られた語りについての分析を行った。

これらの分析の結果を受けて第3章では、障害をもった子どもの母親の母親アイデンティティ形成の全体のプロセスについてまとめ、第4章では障害をもった子どもの母親の母親アイデンティティの形成過程とその構造についての考察を加えた。

本研究の結果より、障害のある子どもの母親の母親アイデンティティ形成過程とは、＜母以外の自分は考えられない＞という認知から始まり、＜わが子への肯定的気づき＞を経て、わが子の存在を＜この子は必要な存在＞であると認識し、＜この子の母であるという自己意識＞、＜母としての役割の理解＞、＜障害児の母としての経験の肯定的受けとめ＞の3つの要素で構成される母親アイデンティティを確立し、その後＜自分のことにも目が向けられる＞ようになり、母親個人としてのアイデンティティを再獲得して自分らしさを取り戻そうとするまでのプロセスであることがわかった。その中でも、＜わが子への肯定的気づき＞は、母親がわが子の存在の受けとめを肯定的なものとして変化させたり、母親アイデンティティを確立するための必須の通過点であることがわかり、障害をもった子どもやその親にかかわる療育スタッフは、母親の育児へのストレスを軽減することだけでなく、子どもの障害に対して肯定的な意味を見出すことができるような認識やレジリエンスが高められていくような心理的支援を行うことの必要性が示唆された。

本研究での対象者は1施設を利用している限られた者であり、対象となる母親や子どもの年齢の幅もばらつきの少ないものであった。今後の課題として、障害をもった子どもの母親アイデンティティの形成過程をより詳細に明らかにするには、さらに対象者数を増やし、母親の年齢や障害をもった子どもの出生順位の違いによる分析や、母親自身のそれまでのアイデンティティのあり方の分析、子どもの疾患を限定した分析なども必要となってくると考える。さらに、青年期や成人期の障害者の母親のアイデンティティのあり方との比較研究も必要であると考えられる。